十八史略

臥薪嘗胆　―現代語訳―

臥薪嘗胆

【第一段】　呉王の闔廬は、伍員を登用して国政をとらせた。伍員は字を子胥といい、楚の国の人伍奢の子である。伍奢は（楚の平王に）罪をとがめて殺されたので子胥は（難を避けるため）呉の国に亡命し、（その後闔廬の計らいで）呉の兵を（借り、それを）率いて（楚の都の）郢に攻め入っ（て父の仇に報い）た。

【第二段】　（その後）呉が越を攻撃した。（敗れた）闔廬は傷を負って死んだ。（そこで）子の夫差が（呉の）王位に就いた。子胥は引き続き夫差に仕えることになった。夫差は父の仇を討とうと心に決め、明け暮れ薪の上に寝（起きし）て（身にこたえる痛みで恨みを新たにし）、（また家の中の部屋に）出入りするごとに（恨みを忘れないようにするため）家来に言わせた、「夫差よ、お前は越の人間がお前の父を殺したのを忘れたのか。」と。

【第三段】　周の敬王の二十六年（前四九四年）に、夫差は（とうとう）越を夫椒の地で破った。越王句践は、敗残兵を率いて会稽山に立て籠もり、（夫差に対して）自らは（あなたの）家来となり、妻は召し使いとなって仕えます（から、命だけは助けてください）と願い出た。子胥は（強い口調で）言った、「（この願いを許すことは）よくない（殺してしまいなさい）。」と。（ところが、）宰相伯嚭は越の賄賂を受け取っていたので、夫差を説得して越王をゆるさせてしまった。

【第四段】　（こうして）越王句践は越の都に戻ると、胆を寝起きする自分の部屋につり下げ、上を向いて肝をなめては（その苦さで敗北の屈辱を新たにし自分に言い聞かせて）言った、「お前は会稽山で受けた（あの苦い）屈辱を忘れたのか。」と。国政の全てを重臣の文種に任せ、自分は范蠡と共にもっぱら軍隊を訓練し、呉を攻略する計画に専念した。

【第五段】　（一方、呉の方では）宰相伯嚭が（夫差に）子胥は自分の策が採用されなかったことを悔しいと思い（王様を）恨んでいますと讒言した。（それを信じた）夫差はそこで子胥に（これで自害せよという意味を込めて）属鏤という名剣賜った。子胥は家族に次のように告げて言った、「（私が死んだら）必ず私の墓にひさぎの木を植えよ。ひさぎは（成長して、呉王夫差の棺桶の）材料にすることができる。（そして、）私の目をえぐり取って東の城門にかけておけ。この目で越の兵が呉を滅ぼすところを見てやろう。」と。そうして（子胥は）自

分で自分の首をはねて死んだ。夫差は（その話を聞いて激怒し子胥の）死体を取って、酒を入れる馬皮製の袋に詰め、長江に投げ込んだ。呉の国の人々は子胥をかわいそうに思って、ほこらを長江のほとりに建て（て子胥の霊を弔い）、そこを胥山と名付けたのであった。

【第六段】　越の国では、十年間人口を増やし、物資を蓄えて国力を充実させ、（次の）十年間で兵を訓練し（戦力を向上させ）た。周の元王の四年（前四七三年）に、越は呉を攻撃した。呉は何度も戦ったがそのたびに敗北した。夫差は姑蘇台に登り、（先に越王句践が会稽山でしたのと同じように）講和を越に願い出た。（しかし、）范蠡は聞き入れなかった。夫差は言った、「私はあの世で子胥に合わせる顔がない。」と。死者の顔に掛ける四角の布を作って（顔を隠して）とうとう自害した。